

## LS6 ランチョンセミナー6

# 「脊柱変形に対する包括的治療； 保存的治療から手術まで」

2023年

11月11日(土)

12:50~13:50

会場:大阪市中央公会堂 第4会場  
(B1F 大会議室)



座長



鈴木 信正 先生

(メディカルスキャニング東京 脊柱側弯症センター センター長)

演者



白土 修 先生

(福島県立医科大学 会津医療センター 整形外科・脊椎外科学講座 主任教授)

# 第57回日本側彎症学会学術集会

## LS6 ランチョンセミナー6

### 「脊柱変形に対する包括的治療：保存的治療から手術まで」

白土 修 先生

(福島県立医科大学 会津医療センター 整形外科・脊椎外科学講座 主任教授)

脊柱変形は、幼小児から高齢者まで全ての年代で見られ、その原因も様々である。本講演では、脊柱変形の中でも症例数の多い、思春期特発性側彎症(Adolescent Idiopathic Scoliosis, 以下AIS)と成人脊柱変形 (Adult Spinal Deformity, 以下ASD)に焦点を絞り、その治療と問題点について、演者らの経験を踏まえ概説を加える。

1) AIS装具療法は、EBMの観点から極めて高いエビデンスを有する保存療法である(Weinstein SL, N Engl J Med 2013)。しかし、身体的および精神的負担が大きく、低いコンプライアンスが常に問題となってきた。この問題を克服すべく、演者らは、軽量、low-profileで、脱着が容易である新しい装具を開発した (Hirata K, Shirado O, ISSLS 2023)。生体力学的研究では良好な矯正力が証明され、多施設共同研究では高い装着率と矯正力に富む有用性が示された。従来からの装具との比較研究でも、非劣性が確認された(遠藤、白土、第57回日本側彎症学会)。AISに対する装具療法のさらなる発展に寄与できるものと考えている。運動療法の有効性は、常に議論的である。欧州諸国では、いくつかの特異的運動プログラムが確立され、カーブ進行の抑止には、高いエビデンスがあると報告される。しかし、米・英国では、その効果には懐疑的である。本邦では、その有効性を山崎らが報告している(第56回日本側彎症学会)。手術は、後方法と前方法が行われる。前者は、椎弓根screwを用いるAll pedicle screw construct(APSC)が主流である。しかし、演者らは、Lenketype 5カーブに局限して前方法(2 screws-2 rods)を採用している。メジャーカーブより少ない範囲の固定で、よりmotion-preservationが可能である。しかし、固定範囲の正確な選択、近位カーブのdecompensation等の問題が残る。治療効果判定の一つとして、疾患特異的QOLによる評価が行われる。SRS-22が世界標準であるが、文化や慣習、国民性の違いにより判定が困難であると言われる。演者らが、日本人用に開発したSJ-27 (Shirado O, ISSLS 2012, Doi T, BMC. Musculoskelet. Disord. 2018, 2021)を紹介する。

2) ASD保存療法としての運動療法。手術治療の大きな合併症の一つであるロッド折損に対する演者らの取り組みなどに関して報告する。